

FD Newsletter

第 13 号 (2025 年 3 月)

発行：長崎純心大学 FD 委員会

〒852-8558 長崎市三ツ山町 235 番地

TEL 095-846-0084 / FAX 095-840-0470

目 次

教育改善の歩み 2024	2
F D 研修会報告	12
S D 研修会報告	13
F D 委員会活動報告	15

教育改善の歩み 2024

教育に関する問題点と組織的改善

言語文化情報学科／文化コミュニケーション学科

改善内容	これまでの経緯
言語文化情報学科のカリキュラムについて、よりスリム化するために、2025 年度入学生より、次の科目を廃止した。 ・グローバルプロジェクト演習Ⅰ ・グローバルプロジェクト演習Ⅱ ・情報検索	本学科の歴史と教育・研究実績、本学科教員の専門性等を考慮し、学科の特性をより明確に表現するために、2024 年度入学生より学科名称を「言語文化情報学科」と変更し、カリキュラムの大幅な見直しを行った。2026 年度までに定年で退職される先生方多いため、カリキュラムの見直しを継続する必要がある。
2024 年度の新カリキュラムより、「文化研究入門Ⅰ（1 年次前期）」および「文化研究入門Ⅱ（1 年次後期）」は、言語文化情報学科の専任教員全員が分担して担当するようにした。担当回数は、1 年生の科目を持っている教員は 1 回、持っていない教員は 2 回を目安とした。 学科の専任教員の専門分野に関する講義を行うことで、学生に様々な分野の学問を知ってもらい、2 年次からの主専攻(英語コミュニケーション専攻、日本文化専攻、世界の文化と長崎学専攻、情報専攻)の選択、3 年次からのゼミ選択の参考としてもらうことを目的としている。	学科共通科目で必修科目でもある「文化研究入門Ⅰ」および「文化研究入門Ⅱ」について、これまで担当されていた教員の退職によって、担当者を補充する必要があった。
「学芸員課程」について、2025 年度入学生からのカリキュラムを見直した。その結果、選択科目を従来の 14 科目から 9 科目に減らし、カリキュラムをスリム化した。	「学芸員課程」のカリキュラムにおいても、「言語文化情報学科」の新カリキュラムに合わせた見直しが必要だった。

福祉・心理学科／地域包括支援学科

改善内容	これまでの経緯
本年度の入学生より、学科名称が「地域包括支援学科」から「福祉・心理学科」への変更し、より学科の教育内容等を明確に表現できるようになった。	昨年までは、学科必須科目であった「地域包括支援論 A」は 1 単位科目であったが、2 単位科目として、教育内容の充実を図った。

特にコース毎に社会福祉士や精神保健福祉士、介護福祉士、公認心理師の国家資格の資格取得と教育内容、カリキュラム等との関連性が分かりやすくなり、学生の興味関心と学びの方向性を示しやすくなった。

また、教育内容や方法においても、本年度から学科必須科目でもあり、1年次の導入の科目でもある「地域包括支援論A」（前期開講科目）を2単位化（15回）することで、本学科での学びの中心となる「福祉」と「心理」の学びの内容を丁寧に講義において説明し、学生の学びのモチベーションの維持、向上にもつながったと考える。また、講義内容に演習の内容も組み込み、学生相互のコミュニケーションの機会を設け、初年次、入学直後における人間関係の構築や教員の学生アセスメントの機会ともなった。

なかでも「福祉」と「心理」を専門的に学ぶ本学科と本学の建学の精神に通ずる「人間の尊厳や人権」について、講義において伝え、本学で福祉や心理を学ぶ意義について説明したことは非常に良かった。

以下に主な講義テーマを示す。

- ・大学で学ぶこと
 - ・建学の精神及び人間の尊厳と人権意識について
 - ・健康管理、ストレスまね地面
 - ・合理的配慮について
 - ・聴覚障害児者支援からコミュニケーションの在り方を考える
 - ・自立を支える価値の多様性について
 - ・生活を意識する
 - ・地域の繋がりの中で生きる意味 等
- ある。

さらにキャリア・就職支援との関連の中で、県内の教育委員会からの依頼で、スクールカウンセラーとスクールソーシャルワーカー（本学卒業生・社会福祉士）が業務内容や仕事の専門性等について講話をして頂いた。併せて「メンタルフレンド」のボランティア募

集もあった。受講後の感想においても、「この学科に来て良かったと改めて思った。みんなが笑顔で学校に行けるような心理カウンセラーになれるように頑張りたい」や「スクールソーシャルワーカーの仕事は職責が重いけどやりがいもあるし、頑張りたい」と言った声が多数寄せられた。学生にとっては、資格取得と卒業後の将来像が繋がり、学ぶ意欲が非常に高まったと考える(大学 HP 掲載・学科「お知らせ」2024/7/19)。 次年度も引き続き、本学卒業生等の力を借り、福祉や心理の専門職等を目指す学生の 4 年間の学びの導入科目として充実させていく予定である。	
--	--

こども教育保育学科

改善内容	これまでの経緯
日誌の記載内容が分かりやすく、学生が書く分量が減ったことにより学生の負担感が軽減された。	保育実習日誌の 1 日の感想・反省のページが枠組みの 4 分の 3 の量を占めていたため、1 列目にテーマ、2 列目に内容とし記入欄を分けた。
保育所実習の日程について来年度より 10 日間に変更することが決定した。実習期間が短くなったことにより、学生の体調や実習への集中が保てると考えられる。	保育所実習の日程について、12 日間行っていたが、他養成校や厚生労働省も 10 日で良いとのが判明した。
幼稚園教育実習Ⅰ・Ⅱにおいて、実習課題はパソコンを使用して作成するよう変更し指導計画も、実習Ⅰ・Ⅱともに、パソコンを使用して作成することを勧めた。これにより、書類作成の効率化を図り、実習前や実習中の準備等にかかる時間を有効活用できるよう改善を行った。	幼稚園教育実習Ⅰ・Ⅱにおいて、実習課題の作成は、指定の様式に手書きで行っていた。また、指導計画は、実習Ⅱではパソコン使用、実習Ⅰではパソコンまたは手書きで作成していた。
小学校実習日誌において、他大学の日誌には、担当指導教員や校長が記載する欄がないことから、記載する欄を削除したり、減らしたりした。担当指導教員や管理職の業務軽減に繋がり、実習受入を好意的に受け取ってもらえると考えた。	小学校実習日誌において、毎日のコメントを指導教員が記載する欄があったり、校長がコメントを書く欄が大きかったりした。

小学校教育実習の依頼時期を2年4月から10月へ変更した。2年前期の成績で総合GPA2.3以上の者を依頼することとする。このことにより2年末に教育実習を取りやめる者が減り、幼稚園教育実習依頼との整合性が保てると考えられる。ただし、規程通り、2年後期で総合GPAが2.5を越えることができた者はその時点で教育実習を依頼することとする。つまり、学生にとっても不安な思いを抱くことが減ると考える。	小学校教育実習の依頼は1年末の総合GPA2.0以上の者すべてを4月の段階で行っていた。しかしこの中には2年末に総合GPA2.5に届かない者も多くおり、小学校教育実習を取りやめることにより実習依頼校に対して失礼にあたることになると共に、その時点で新たに幼稚園教育実習を依頼するなど、整合性の取れた仕組みではなかった。
小学校の採用試験が早まったため、再チャレンジの時期を3年時前期終了時に変更し、総合GPAを2.60以上にするなど、規定変更をした。採用試験対策でもあるが、学生の将来を考え改善を行った。	小学校コースの再チャレンジは、3年次終了時における単年度GPAが2.80以上等の履修規定であった。

学生委員会

改善内容	これまでの経緯
自動車バイク通学許可について、年間で手続きが出来る機会を増やす。また、手続きの方法等について見直しをし、学生側・大学側双方にとって、より効率的に運用が出来るよう改善する。このことにより、自動車バイクでの通学を希望する学生が確実に手続きをし、正規の方法で通学できるよう、環境整備を行う。	自動車バイク通学許可については、年間3回の申請期間を設定し、手続きを受け付けている。しかし、自動車バイク通学許可を取っていない学生による、大学周辺（民間所有の土地）への無断駐車が頻発し、地域の方からの苦情を招いている。
三者会について、学生会、純心祭運営のための連絡会としての機能に加えて、大学当局と学生との直接的な意思疎通、連絡、情報交換の機能を持たせるようにする。	「三者会」は、学生会、純心祭実行委員会、教職員の三者によって構成する。この会は学生会や純心祭運営のための連絡会の機能を持っている。
学生会へ対し、“創造的仕事分野”を開拓することを促し、来年度の体制から「生活改善」の部署を学生会内に立ち上げることとなった。	学生会の活動内容として、これまで、学生会費の運用、大学の学校行事の手伝い、など“定型の活動”が多い現状がある。

FD委員会

改善内容	これまでの経緯
【授業アンケート質問項目の見直し】 質問の意図が一義的に（曖昧さ無しに）伝わることを期して、従来の質問項目の文言を逐一見直した（ex. 「成績評価の基準が明確」→(改)「成績評価の方法や基準が明確」／「授業より知識や技術が身につく、自分の成長を実感できる」→(改)「この授業を履修する前と今とを比べた時、何らかの点で自分の成長(知識・技能の習得、視野の広がりや思考の深化その他)を感じることができる」etc.）。また、従来無かった、学生の自己評価を問う質問を新規に2つ設けた（質問9・質問10）。最終的に11/6開催の委員会において、学生会代表の意見を一部反映させたアンケート改訂版を完成させ、12/2にIT業者との打合わせを済ませて、来年度実施の目途が立ったところである。	今(2024)年度まで使用してきた学生による授業アンケートの質問項目は2016年度前期から用いているもので、以後、一度も見直しが行われてこなかった。これまで教員の一部の間で、「学生に教員がどうであったかを聞くだけでなく、自己自身の取り組み姿勢の自己評価もさせるべきでは」という声が上がっていたこともあり、今年度の一年かけて、各学科会や学生会代表の意見なども聴取しながら慎重に見直しを進め、2025年度から新しい質問フォームで実施できるよう検討を進めた。

図書委員会

改善内容	これまでの経緯
今年度も引き続き、図書館利用者アンケートの結果を踏まえて「図書館にあまり行かない」と回答した学生にも届くように様々な展示やイベントを行った。 展示61回、イベント4回 司書課程学生が作成したブックリストやポップの展示6回	図書館に来ない学生たちに図書館に関心を持ってもらうために図書館の蔵書を活用した様々な展示やイベントを昨年度より多数計画した。イベントの広報なども幅広く行った。また参加型のクイズなども企画・実施した。
1年生対象の図書館ガイダンスを4月17日のGPSアカデミックテストの日実施することができた。4月中に図書館利用の案内をスタートすることができた。	前年度は学科別に文献講読の授業を数回分けて実施していたため5月に図書館ガイダンスを受ける学生がいて、図書館利用の理解に時間差が生まれていた。
Web-OPACのサーバーのクラウド化を行い、OPACのアクセスがスムーズに行えるようになった。	Web-OPACのアクセスに時間がかかっていた。
毎年、県内大学図書館の合同企画として実施のLibrary Lover's Nagasakiでは、純心博	図書館だけの催しであった。

物館とのコラボとしてスタンプラリーを実施した。	
書架サインの刷新を行った。大きな文字を使用して利用者が分かりやすいサイン表示とした。	書架サインが見えづらく、実際の書架上の図書とのずれが生じていた。
リクエストボックスを設置した。学生からのリクエストが増えた。	カウンターのみでリクエストを受け付けていた。
昨年度から除籍基準に照らして不要となった雑誌や蔵書を純心祭にて図書館内でリサイクル本として配布を行った。今年も引き続き実施。リサイクル本の常設コーナーを図書館入り口の右奥に設置した。	昨年は純心祭の時にのみのリサイクル本の配布であった。

健康管理委員会

改善内容	これまでの経緯
2024 年 10 月から C 棟 1 階に保健室分室を設置し運用を開始した。これにより体調不良者、搬送スタッフの負担軽減となった。	体調不良者を担架等で保健室まで搬送するにあたり、搬送スタッフの確保や悪天候時の搬送が困難な状況であった。また、体調不良者が同時に発生し、保健室（ベッド数 4）では対応できないことがあった。
C 棟 2、3 階の廊下に電話を設置したことにより救急要請がすみやかに行えるようになった。	C 棟廊下に電話がなく、体調不良者が発生した場合の連絡ができなかった。
UPI 検査を健診の日に保健センターでの実施とすることで、結果を保健室と学生相談室で共有し事後措置も双方で分担することが可能となった。また、対象者の情報交換を密に行うことで、より効果的な学生へのアプローチを行うことができた。	多様な学生に対し保健室は「保健調査票」を記入させ、学生相談室は「UPI 検査」（新入生対象）を実施して学生支援を行なってきたが、近年双方の情報共有とより効果的な支援を行うための方策が必要となった。

教学企画室

改善内容	これまでの経緯
学科横断的な課題ということで、学生の「ボランティア」の単位化について検討し、2025 年度からの実施となった。	特になし

学科横断的な課題について議論を行い、必要なことについては既存の指針を見直すべきということになり、一つの帰結として、地域連携センターでの大学の「社会貢献方針」の見直しにつながった。	特になし
--	-------------

実習・インターンシップ支援（実習関係）【福祉・介護】

改善内容	これまでの経緯
ソーシャルワーク実習及び精神保健福祉援助実習において、実習支援システムの導入により、学生・実習機関・大学間の情報の共有と効率的・効果的な指導の充実が図られた。	従来は学生の実習計画、実習記録、指導者のコメントの記入などを紙面を使って行っていたが、システム上での入力、閲覧ができる実習支援システムの導入を図った。

実習・インターンシップ支援（実習関係）【保育・施設】

改善内容	これまでの経緯
保育所・施設共に実習日誌の改善を図ったことで、学生の負担感が軽減された。	日誌の記入欄が多いとの意見があり検討をしていた。
保育所実習の日程については来年度より10日間に変更することが決定した。実習中の休憩時間については実習施設への対応を行っていくことの申し合わせができた。	これまで、保育所実習のみ12日間であったが、他の養成校は10日間で実施していた。 そこで10日間で問題はないか検討を行っていた。また、実習中の休憩時間の確保についても、対応策を協議していた。
実習評価票の内容は現在、案ができています。提出書類等のデジタル化対応については検討を始めている。特に守秘義務等について問題がないか確認中である。	保育・施設の評価票の内容については来年度に新たにできるよう検討を重ねている。また、今年度は全国保育士養成協議会、九州ブロック長崎大会において養成校との意見交換、分科会担当などがあり、保育士養成の実態などについて把握できる機会があった。特に提出書類のデジタル化が進んでいることが分かった。
実習時間や休憩時間、実習内容など大学での指導内容と実習園の対応がかみ合っていない内容については学生に、丁寧に説明し、注意喚起を促すとともに、必要であれば教員が施設に電話で説明を行った。	学生に実習に関するアンケートなどを取ったことで実習についても把握できた。

実習・インターンシップ支援（実習関係）【心理（学部）】

改善内容	これまでの経緯
これまで保健医療分野の実習先開拓を模索していたが、2024 年度より小児科系医療機関である「こども医療福祉センター」が実習施設として登録され、実習生がニーズに合わせた実習先を選択することができるようになった。	これまで実習生が自らの志向性に合わせて多様な実習施設の中から学ぶ先を選択することができる環境を提供するべく、心理実践実習の中心となる保健医療分野の実習先の開拓を模索していた。

実習・インターンシップ支援（実習関係）【心理（大学院）】

改善内容	これまでの経緯
教育領域の施設であり、医療機関としての機能も併せ持つ長崎大学保健センターを新たに実習先として追加した。	実習先として教育領域が不足していた。また、心理実習では医療機関が必須となっており、実習先を増やすことが課題となっていた。

日本語教授法実習支援

改善内容	これまでの経緯
2024 年にスタートした「日本語教員試験」の内容を加味して、模擬授業を行うなかで、理論的な項目紹介やそれについて解説をする時間を増やした。また、「準備」「相談」「模擬授業」「振り返り」も自己評価を中心にして段階的に行うことを一層強化した。	国家資格である「登録日本語教員」制度の開始に合わせて、「日本語教員養成課程」のカリキュラムの変更を行なった。本課程内の必修科目である「日本語教授法実習Ⅰ・Ⅱ」についてもこれまでの内容分析を行い、今後の計画を行なっていく。

博物館実習支援

改善内容	これまでの経緯
外部講師による実習の成果を検証するために、講師の方から各学生についての評価を毎回口頭で確認するとともに、学生から講師の実習への評価を学内教員の実習中に聞き取るようにした。	これまで、学生の提出する実習ノートをチェックすることで、実習内容の成果を確認してきたが、十分に把握できないところがあったので、口頭でよりきめ細かく聞き取りをおこない、改善につなげられるように配慮した。

教学マネジメントWG

改善内容	これまでの経緯
シラバス項目を見直し、フィードバックとアクティブラーニングに関する欄を新設した。また、ディプロマポリシーの到達度を測定するための評価表を作成した。	前年度はナンバリングを、カリキュラムマップ、カリキュラムツリーの整備を行った。

学生相談室

改善内容	これまでの経緯
学生相談室年報を紙媒体からデジタルデータへ変更したことで印刷費が削減され、余剰冊子を保管・管理する必要がなくなった。また配布方法を変更することで、学生相談室の広報をしつつ個人情報保護することが可能となった。	学生相談室年報は紙の冊子で作成されてきた。しかし印刷費が10万円以上かかり今後更に上昇する可能性が高いこと、余剰冊子の保管場所の確保が難しいこと等を鑑み、関係者へのヒアリングを実施した上で作成方法を変更した。またデジタル化に伴い個人情報保護へより一層配慮が必要となったため配布方法を変更した（概要版は全配布先、全体版は関係者のみ）。

地域連携センター（産学官連携部門）

改善内容	これまでの経緯
本学教員による学校での出前授業や公共施設における出前講座、長崎純心大学公開講座の活性化について検討し、一定のルールを策定し、全教員に意向・希望を聞いた。来年度からは毎年それらの情報をまとめて学外に発信することとなった。	特になし
学生のボランティア活動の単位化について、教学企画室に加えてセンターでも検討を行い、2025年度からの制度化に結びついた。	12月に全学生を対象にボランティア活動の活性化に関するアンケート調査を行った。

地域連携センター（医療・福祉連携部門）

改善内容	これまでの経緯
昨年度に引き続き、学生達が学生 SA として「地域包括支援実習」の運営・企画に主体的に関わった。また、今年度は 1 年生の参加者が多く、「地域包括支援実習指導Ⅰ」「地域包括支援実習指導Ⅱ」に SA が関わることによって、上級生が後輩の学習をサポートするとともに、後輩が悩みや疑問を上級生に相談しやすい良い雰囲気が醸成されていた。	「地域包括支援実習」において学生を SA として起用し、実習期間中は有償で地域医療セミナーの実行委員をすること、使用する事例をこれまで作成したものをベースにすることで、ミーティングの時間も減少し、学生への負担が減った。実習中においても SA の学生がファシリテーションを担うことによって、実習生が安心して取り組むことができたことに加え、SA を担った学生の運営・企画力やファシリテーション力、心理・福祉の知識が向上した。
地域包括支援論 B（共修授業）は本学から長崎大学医学部への大学間移動が必要なため、交通手段の確保が課題となっている。特に、40 名以上の受講生が参加し、大規模な移動が求められるため、効率的な手段の確保が必要となる。しかし、昨年度はタクシーの運転手不足が影響し、移動手段の確保が困難となった。さらに、移動支援が必要な学生への対応も求められた。これらの事を踏まえて、学生や教員との協議を行い、移動の際に一部区間でリフト付きのサロンバスを使用した。学生からも満足の声上がり、移動手段の確保と支援ニーズへの対応がスムーズに行われた。	これまでの共修授業では、本学から長崎大学に移動する際は、タクシーを使用していた。
スプレッドシートのリンクをクラスルームで共有することによって、学生は勤務日時をいつでも確認・修正ができるようにした。連絡事項に関しても、スマホから見ることで、進捗状況をリアルタイムで確認できるようにした。それらによって学生と教員の負担が軽減するとともに情報共有もスムーズになった。なお、利用者の個人情報が含まれる連絡については、従来通り、部門室のノートで行っている。	これまでの「南高愛隣会利用者調査」のアルバイトでは、医療・福祉連携部門室のパソコンからのみ、勤務日時、学生同士や教員との連絡事項のスプレッドシートをみることができた。学生は、シフトを修正する際は、教員にメールするか、部門室に来るかという対応をしていた。進捗状況についても部門室に来て、学生が連絡事項をパソコンやノートを確認してから作業を始めていた。

2024（令和6）年度 F D研修会報告

2024 年度の F D 研修会は、テーマを《地域連携による大学教育の質的向上を目指して》と掲げ、2025 年 3 月 7 日（金）、10 時から 15 時までというスケジュールで行われました。参加者は教職員計 96 名と盛会でした。

今回の研修会は特に、ゲスト講師にお迎えした山本健慈先生（和歌山大学元学長・一般社団法人国立大学協会参与・学校法人大阪観光大学理事長）ならびに、山本先生と旧知の間柄である本学地域連携センター所長水畑順作教授のお力で実現したところが大きく、F D 委員会よりこの場をお借りして厚くお礼申し上げます。



ゲスト講師の山本健慈先生

L701 教室で行われた午前の部(10:00-12:00)では、毎回恒例の委員会報告と委員長による研修会テーマの説明に続いて 60 分間、山本先生にご講演をいただきました（講演タイトル《大学人として生きるということ ～2100 年人口 5000 万？時代に向けて～》）。学長・理事長の地位に就かれてからも一人一人の学生との「対話」を絶えず心がけておられるという山本先生は、もともと社会教育・生涯学習論の研究がご専門だったこともあり、地域の人々との関わりが青年期の人間形成に果たす役割の重要性に着目してこられました。そして、先生が常に問い続けておられるのは「大学を地域とどう結びつけるか」という問題であり、その深い思索と豊富なお経験を踏まえて語られた次のことばは、聴衆に大きな感銘を与えました——「地域には無数の課題があり、それに必死で立ち向かう主体がいる。大学（研究者）は、地域の主体の苦悩を受け止め共有する立場として地域連携に臨むべきである」。



午後の部(13:00～15:00)は、水畑地域連携センター長に司会を託し、ワークショップ形式で行いました。「ひまわりカフェ」のテーブルに 4 人ずつ、参加教職員に（なるべく所属部署等が重ならないように）座ってもらい、①私たちの学生を見て思うこと ②学生に必要な経験と考えられる支援の方法 ③本学の地域連携や社会貢献に必要なこと ④その他 の順でグループ内の意見交換および発表を行いました。臨席された山本先生からもご助言をいただいたほか、最後に、「地方の私立大学はいま経営が大変厳しい状況にあるが、《長崎》は他の地域や海外からみればひとつのブランドであり、社会とうまくつながることができれば希望がある。ぜひ純心大学にがんばってほしい」と、力強いエールをいただきました。

この研修会を機に、従来も活発に行われてきた本学の地域連携がいつそう輝きを増し、学生の教育の充実と大学そのものの発展がもたらされることを期待します。

（文責 坂本雅彦）

2024（令和6）年度 SD研修会報告

《長崎純心大学の挑戦 一教職協働で教育の充実一》とテーマを掲げた SD 委員会（委員長 汐除時也事務局長）企画の SD 研修会を、2024 年 8 月 21 日(水)の 10 時から 15 時半にかけて、学内で開催しました。この研修会の目的は、「全ての教職員が長崎純心大学の建学の精神の実践者であることをより一層自覚し、急激な社会情勢の変化、教育研究の高度化・複雑化に対応するために、教職員がより一層の資質向上を図ること」であると事前に説明されており、当日は本学教職員計 91 名に加え、姉妹校の鹿児島純心大学・鹿児島純心女子短期大学に勤務される教職員 4 名にもご参加をいただきました。《教職協働》は、以前から、SD 研修会や FD 研修会の事後に行う参加者アンケートで「今後どのようなテーマでの研修会開催を望むか」を問うと、毎年決まって要望が高かったテーマです。それを今回、正面から取り上げ、全員で考え、議論できる運びとなりました。

研修会プログラムの主な内容は、次の 4 つから構成しました。

講演 1（55 分） （学長）「本学の建学の精神について」

講演 2（45 分） （事務局長）「今こそ教職協働」

分科会（60 分） *4 つの分野（「入試広報」「教育」「学生支援」「IT／生成 AI」「図書館・博物館」）ごとに会場を分け（1 会場あたり参加者 18 名程度）、その分野で“今年挑戦する教職協働”について協議する。

全体会（55 分） *各グループで決めた「今年挑戦する教職協働」の発表。

今回の SD 研修会の際立った特色として、論点を《教職協働》に絞ったことの他にも次の 2 点が挙げられます。

第一は、本年度より新学長に就任されたシスター坂本久美子先生（長崎純心大学としては第 3 代、本学前身の純心女子短期大学から数えれば第 6 代学長）より、「純心」の語のキリスト教的意味について、神学博士としての学識に裏打ちされたご講義がなされたことです。深遠かつ高度に学術的な内容を、一般教職員にも十分に理解可能な丁寧な語り口でかたちで学長自ら講じていただけたことは、信者であると否とを問わず参加教職員一同に深い感動をもたらしたことが、事後の参加者アンケート結果にもはっきり表れていました。

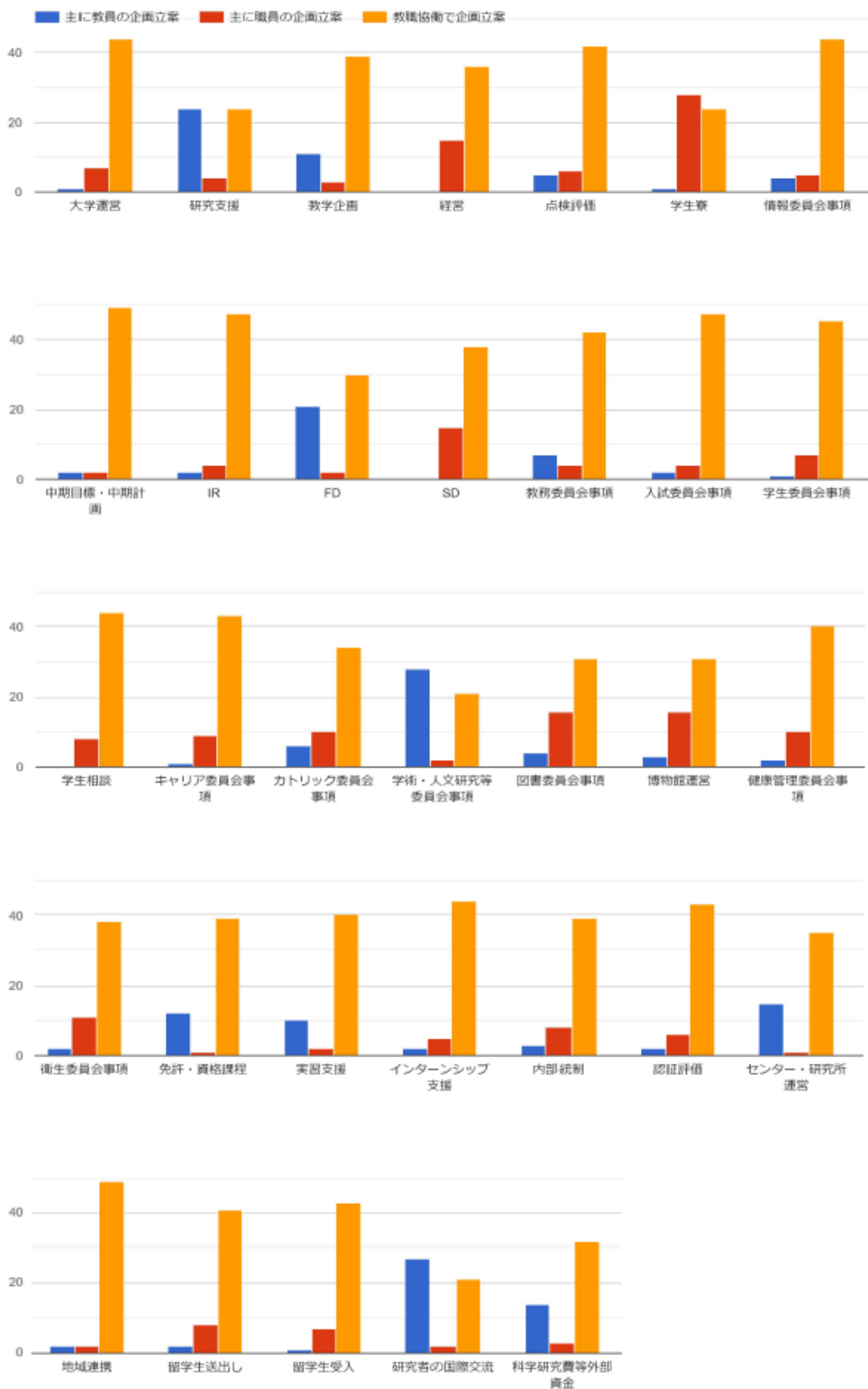
第二は、SD 委員長の計らいにより、今回の研修会の実施に先だち、教職員一同に対して《教職協働》に関する意識調査が Google フォームを利用して行われ、その結果も踏まえつつ分科会での討議が行われる流れとしたことです。次ページに参考として示すように（大学の各種業務のそれぞれについて「主に教員の企画立案」・「主に職員の企画立案」・「教職協働で企画立案」のうちどれが望ましいと思うかと尋ねた質問に対する、教員を除く職員 28 名と教員 25 名、計 53 名からの回答を集計したもの）、ごく一部を除く大半の業務では「教職協働」で取り組むことを望む声が多く、今後の大学の組織運営のあり方についても貴重な示唆が得られたように思います。

（文責 坂本雅彦）

【参考】 Google フォームによる「《教職協働》に関する意識調査」(2024 年 8 月・SD委員会実施)

結果の一部 *教職員計 53 名 (うち教員 25 名) の回答

3 次に挙げる本学の業務について、誰が企画・立案・遂行するのが望ましいと思いますか？



FD委員会 活動報告

2024 年度

■FD委員会（自己点検評価委員会と同時開催）

第1回	2024 年 4 月 10 日	第2回	2024 年 5 月 1 日
第3回	2024 年 5 月 29 日	第4回	2024 年 7 月 3 日
第5回	2024 年 10 月 2 日	第6回	2024 年 11 月 6 日
第7回	2025 年 2 月 12 日		

■学生による授業アンケート

前期 2024 年 5 月 27 日（月）～ 9 月 20 日（金）

後期 2024 年 11 月 22 日（金）～ 2025 年 2 月 21 日（金）

■教職員による授業参観

通年で実施

■FD研修会

日 時：2025 年 3 月 7 日（木）10：00～15：00

テーマ：地域連携による大学教育の質的向上を目指して

講 師：学校法人大阪観光大学 理事長 山本 健慈 先生

■研究倫理・コンプライアンス研修会 ※オンデマンド形式

講 師：松場 里弥 氏（ロバスト・ジャパン株式会社）

期 間：2024 年 12 月 20 日～2025 年 2 月 21 日

内 容：研究をとりまく環境、研究活動におけるコンプライアンス、研究活動における不正行為および研究校正 ほか

図書・雑誌の案内

※教育開発推進室所蔵の図書や雑誌の貸出しを希望される方は、図書館で手続きを行ってください。

■定期購読雑誌等

「高等教育研究」日本高等教育学科会編 玉川大学出版部発行

「IDE 現代の高等教育」IDE 大学協会発行

編集後記

つい先日（2025.3.5）、新年度の校務分掌案が全教職員に示されたところですが、それによると、これまで大学組織の中で別個の委員会であった「FD委員会」と「SD委員会」が統合され、2025年度からは「FD・SD委員会」となるようです。2012年度に創刊以来、《FD Newsletter》の題名を掲げて発行してきた本ニューズレターも、次号からは《FD・SD Newsletter》となることでしょう。

2024年度におけるSD研修会のテーマであった「教職協働」にしても、FD研修会のテーマの「大学の地域連携・社会貢献」にしても、決して単年度だけで解決が見通せる課題ではないはずです。年度から年度へ課題意識が継承され、議論が深まっていくことを期待したいです。

2024 年度 FD 委員会